

今夏の猛暑の影響だろうか、十一月上旬というのに例年になく暖かで、紅葉も少し遅れるとのこと。学会はもう間近。校正に追われる日々が続く。校正に従事していただいている奈文研史料調査室の方々や幹事諸氏、編集実務担当の渡辺晃宏氏の御苦労に感謝したい。

第一六号では、一九九三年出土の木簡について、全国六〇カ所の遺跡出土木簡を収録することができた。報告していただいた方や、遺跡の発掘に尽力された方、関係諸機関に、厚く御礼申し上げます。一九七七年以前の木簡は平城宮跡のみである。論文は、昨年の研究集会で報告していただいた山里純一氏と奥野義雄氏の雄篇二本と、今泉隆雄氏からの投稿を収載することができた。また幹事の今津勝紀・鈴木景二の両氏から、興味深い近世の史料を紹介していた。また出来るだけ写真を多く掲載する方針をとったので、全体として三〇〇頁近くとなり、これまでで最も分厚いものとなつた。

編集作業を進めていてよく話題となるのは、次号からの印刷についてである。活字による印刷は数年のうちに確実に終焉する。電算写植になった場合の木簡釈文の組みはどうなるだろうか。不安が残る。

一つの解決方法として、木簡の写真を出来るだけ掲載するように

すれば、釈文の組みに少々問題があつても、その欠点を補えるだろう。しかし用紙や印刷費について、検討すべき課題が多い。またその場合には、鮮明な写真が是非とも必要となるが、現状はかなり心細い。こうした『木簡研究』の印刷に関わる問題について、会員諸氏の検討をお願いしたい。

なお、『木簡研究』などをもとに、奈文研で木簡のデータ・ベースを作成し、木簡学会の了承のもとに、学術情報センターに提供していることを附記しておきたい。

(和田 蕉)